

# 授業評価におけるアンケート実施の方策と評価と結果開示

—私立・地方・新設・小規模のハンディを越えて—

船倉武夫 (funakura@cs.kusa.ac.jp)

倉敷芸術科学大学 産業科学技術学部

## 1. アンケート実施の前提

過去報告されてきた多くの実践例は、次の要件の少なくともひとつを満たす。

- ① 運営形態: 国立(独立行政法人)
- ② 立地条件: 大都市圏(関東、関西、中京)
- ③ 設置: 伝統校(仮に 1985 年以前の設立)
- ④ 規模: 中規模以上(在学生数 2 千名以上)

これに対して本学の場合、次の通りいずれも満たさない。

- ① 私立大学[学校法人加計学園: 岡山理科大学(岡山市 1964 年開学)、千葉科学大学(銚子市 2004 年新設)などを経営]
- ② 地方都市(倉敷市郊外 水島地区)
- ③ 創立 10 年目(1996 年開学)
- ④ 学生定員数 1,600 名 (2003 年 5 月 1 日: 在籍者数 1,646 名)

このアブストラクトは理念概要を述べ、数値データは講演においてスライドで示す予定である。

## 2. 大学の環境

2004 年、大学の設置数は「国公立: 私立=1:3」である。県別人口に占める大学生数は全国平均 2.2%、その平均値を超えるのは、9 都府県(滋賀・宮城・神奈川・石川・愛知・福岡・大阪・東京・京都)因みに最多は京都 5.8%、最小は長野 6.7%、岡山は平均値並みの 2.15%。

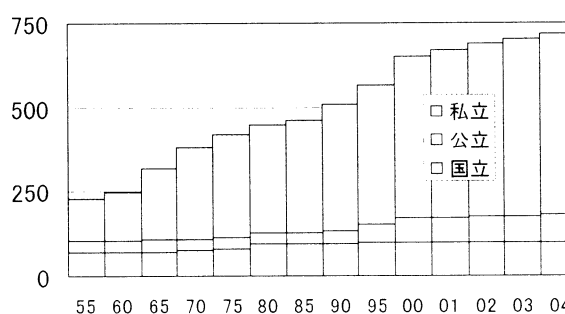
1991 年～2004 年に、国立 4 校、公立 41 校、私立 167 校が設置される。これらは、大学数の 3 割を占める。

1 大学あたり在学生平均数は、国立 4,800 名、公立 1,400 名、私立 3,800 名、全大学 3,700 名。ところで、私学の半数以上は、在学定員数が 2,000 名未満である。

大規模校の学部単位で授業評価を実施しているシステムは質の面で不可能であった。つまり多人数の講義科目を想定して、如何に効率よく、効果的に、好印象の授業を与えるかが基本的なスタンスだが、小規模校では、授業クラス 100 名以上は少数派である。

本学も、3 学部 7 学科[芸術学部(美術学科、映像デザイン学科、工芸デザイン学科)、産業科学技術学部(コンピュータ情報学科、起業学科)、生命科学部(生命科学科、健康科学科)]と再編され、多彩な構成である。当然、授業形態も教員集団の質も多様である。

大学の設置数



### 3. 全学対象アンケート実施の意義

学部ごと独自仕様を採用するので、複数のアンケート用紙を準備、実施であり、単数の場合に比較して、コストが増大する。経費は直接の作業から集約・分析にまで及ぶ。個別的アンケートは従来から、個々の教員がその授業の特性に応じて実施してきた。それら多くはテストなどの機会を利用するため、記名式である。実施者の意向が回答者へ影響し、客観性に欠ける。したがって全学一斉実施では無記名が大原則である。

FDの本義が組織としての教授力開発との観点に立てば、授業評価で獲得するデータは、学部学科間の相互比較、科目区分による相互比較[専門と教養、共通科目(学部・大学)、単位互換、他学部他学科履修、卒業と資格]に利用できなくてならない。

### 4. 典型的な授業アンケート項目の問題点

「内容は将来役に立つか」就職活動や資格取得のためか、人生を豊かにする意味なのか、不明だ。「目標が明確で体系的に行われたか」数学のような論理的構成するライン型、実験での興味を引くように次々異なるテーマを与えるループ型、実習で同じテーマを繰り返し与えるスパイラル型、授業形態によって異なり、設問としてはあいまい。「声や言葉は明瞭で聞き取りやすかったか」マルチメディア化された授業形態において機器類など教員が主因でないトラブルまで教員評価につながりかねない。「適切な板書を行ったか」黒板を背にした一斉授業が前提の設問である。理数系では黒板多用型で、教員は黒板に数式・文字を書きながら講義する。文系では多人数の講演型で、黒板にキーワードを書き、受講者に向かって語りかける。実習では、教員は学生の活動を背から見守り、アドバイスを送る。学生・教員の視線ベクトルに配慮がない。

### 5. 項目の選定と構成

観点別評価 ①関心・意欲・態度 ②思考・判断 ③技能・表現 ④知識・理解 を出発点とした。大学教員で②は大前提であり、学生からの評価はなじまないと外した。授業評価の正当性を検証のバッチテスト用として、回答者の所属学科・年次・性別・自己評価 (1)授業への意欲 (2)学修時間 を尋ねた。回答時間5分を考慮、設問数に制限、適切性を見るため、無作為に並べた。

- |                |            |             |
|----------------|------------|-------------|
| ①⇔教員のパフォーマンス   | (6)教育への熱意  | (8)課外指導     |
| ③⇔教員のプレゼンテーション | (3)授業の進む速さ | (7)教員の説明や指導 |
| ④⇔授業のコンテンツ     | (4)授業のレベル  | (5)授業内容への興味 |

### 6. 評価基準と開示

設問ごと 5 段階回答分布の百分率を求め、加重をかけ点数化した。評価は、高等学校生徒指導要録による学習成績概評の基準を準用した。各教員へ 6 項目をチャート図にして返却した。定期試験の受験資格を出席率要件を準用して、回収率も 5 段階評価した。出席を取る努力以外、必修／選択による要因が影響するが、必修担当で高めに評価することで実施した。

### 7. 教員の意識の向上と協力率

用紙に教員名・科目名・開講曜日時限をあらかじめ印刷し、上書きした袋に仕分けした。実施の有無を問わず、全教員へ配布し、実施・未実施は教員の意思として、事務を介さず教員へ任せた。学長声明「実施者が不利益を被らない」もあり、専任教員の協力率 93%であった。